

地中海古代都市の研究(77)

デルフィのマッシリア人の宝庫調査 1994 (1) 遺構の概要

正会員 ○伊藤重剛¹⁾ 林田義伸²⁾ 伊藤好輔³⁾ 森 倫子³⁾準会員 上原慶久⁴⁾ 中川明子⁴⁾

1. はじめに一研究の目的

ギリシアの中央部に位置するデルフィは、古代ギリシアにおいてはオリンピアと並ぶ全ギリシア的な神域であり、有名な神託の場所であった。今回、筆者らはそのアテナ・プロナイア神域の実測調査を行なったのでその概要を報告する。

調査はギリシア政府考古局の許可を得て平成6年7月15日から9月17日まで約60日間行ない、ギリシア側共同研究者として、デルフィ考古学博物館館長E・ペンタソス氏、アテネ大学教授G・ラヴァス教授が参加し協力した。本篇では、主に遺構の現況について説明する。

デルフィの神域には主神域であるアポロ神域と副神域のアテナ・プロナイア神域があり、19世紀末から20世紀の初頭にかけてフランス隊による大掛かりな発掘調査が行なわれ、現在見られるほとんどの遺構が発掘された。¹⁾アテナ・プロナイア神域は、主神域であるアポロ神域にいたる「前の神域」という意味で、主神域とは約500mほど離れている。現在、円形神殿が1棟(前380-370年頃)、新旧のアテナ神殿が2棟(前6世紀末、365-360)、宝庫が2棟(前540-500年頃、前475年頃)の合計5棟が残っている。²⁾今回実測調査したのはその中の「マッシリア人の宝庫」であり、フランス隊による調査を、設計法および施工法の観点から補う目的で再調査を行い、詳細な図面の作成と写真撮影を行なった。

実測にはエスロンテープとコンベックスを用い、遺構は15分の1、周囲に残る部材については5分の1で図面を作成した。

2. マッシリア人の宝庫

デルフィはオリンピア同様、全ギリシア的な神域であったため、各都市国家が競って宝物を寄進し、それを収納しておく宝庫も多数建設された。マッシリア(現在のフランス、マルセイユ)人の宝庫もそのひとつであり、紀元前540-500年ころのものとされている。

材料は基礎部分が石灰岩であるほかは、全てパロス島産の上質の大理石でできている。平面は単純で、ディ・スタイル・インアンティス形式の前室(プロナオス)とほぼ正方形の主室から成っている。フランス隊によると、様式はアイオリス式と呼ばれているが、柱頭に渦巻きはなく、ペルガモンの椰子の葉形柱頭に似ており、イオニア式とも呼ばれているようだ。建物の規模はトイコベートのモールディングを含めて、外法が幅8.420m奥行き6.159mである。

遺構の残存状況は、北側部分で壁の一部が残っており、高さが地上から約2m、低いところは基礎しか残っていない。床部分は残っておらず、フランス隊の発掘によって床下の土の部分が露出し、そこには出土した上部の壁部材が整理して置かれている。

以下、遺構の概況を説明するが、部材の名称は不必要な混乱を防ぐためにフランス隊の報告書の名称をそのまま用い、上から順に壁ブロック、オルソスタット、トイコベートまたは、スタイロベート、クレピス、ユーティンテリア、基礎とした。

1) 基礎・ユーティンテリア・クレピス

現在の状態で確認できる最も下の部材は、石灰岩から成る基礎の部材で、半ば土に埋まっている。地中部分はよく分からないが、ほとんど切出しのままの状態のようで、外側では上面から10cmほどまで仕上げが施され、内側では荒い仕上げのままである。部材幅はユーティンテリアの幅より20~30cmほど大きく、その分だけ内側に突き出ている。

ユーティンテリアは基礎と同じく石灰岩でできており、どちらも外周面は仕上げがされているものの、その外周線は互いに入りがあり最大で3cmぐらいのズレがある。施工の程度は当然ながらユーティンテリアがよいので、ここから上の部分が、建物の厳密な寸法に従った施工されたものと思われる。

クレピスから上が大理石である。両方とも部材幅はほとんど同じであるが、その間には、0.5~1.0cmの

1) 熊本大学助教授 工博 3) 同大学院生 4) 同学生 2) 都城高専助教授 工修

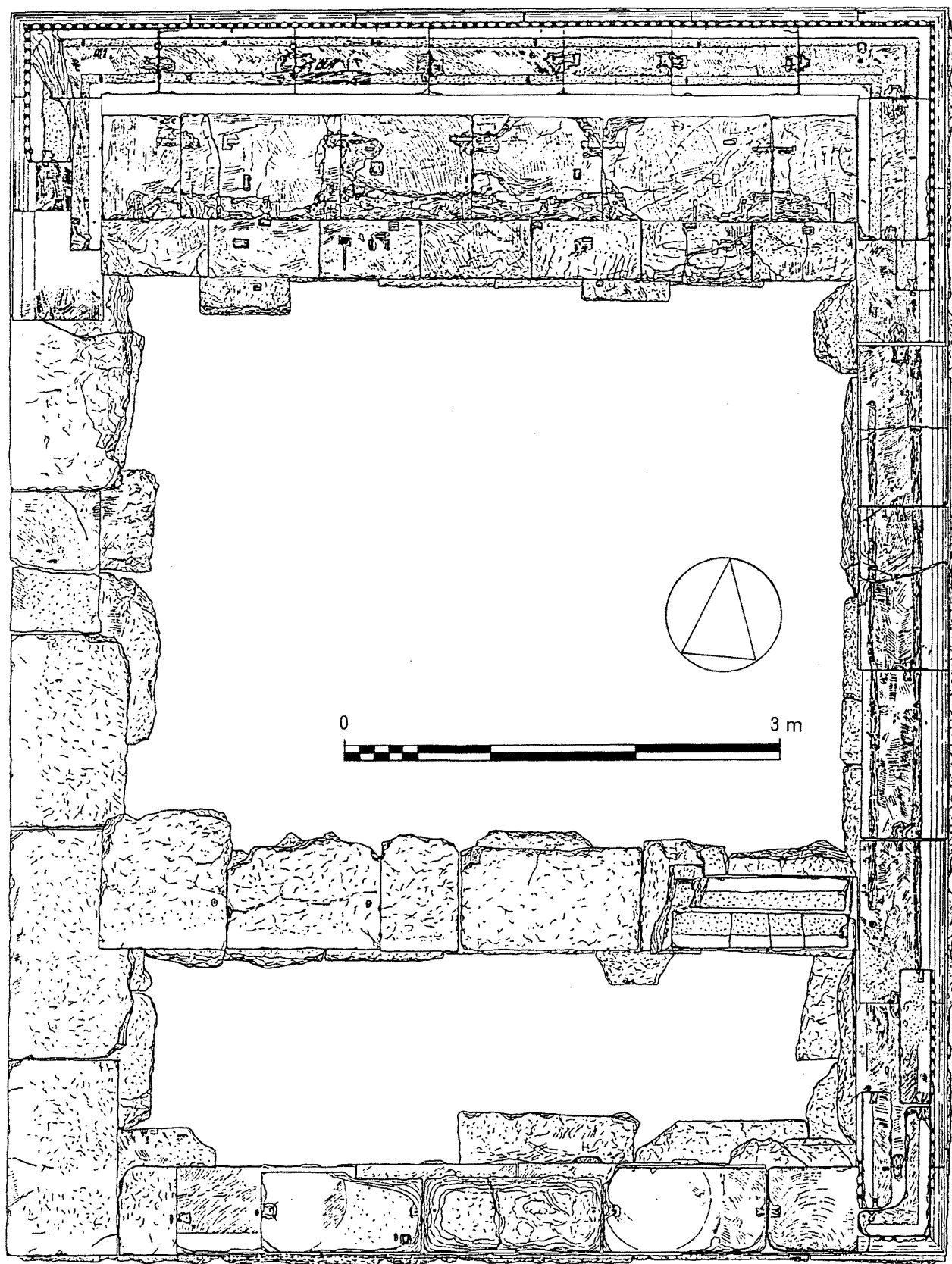
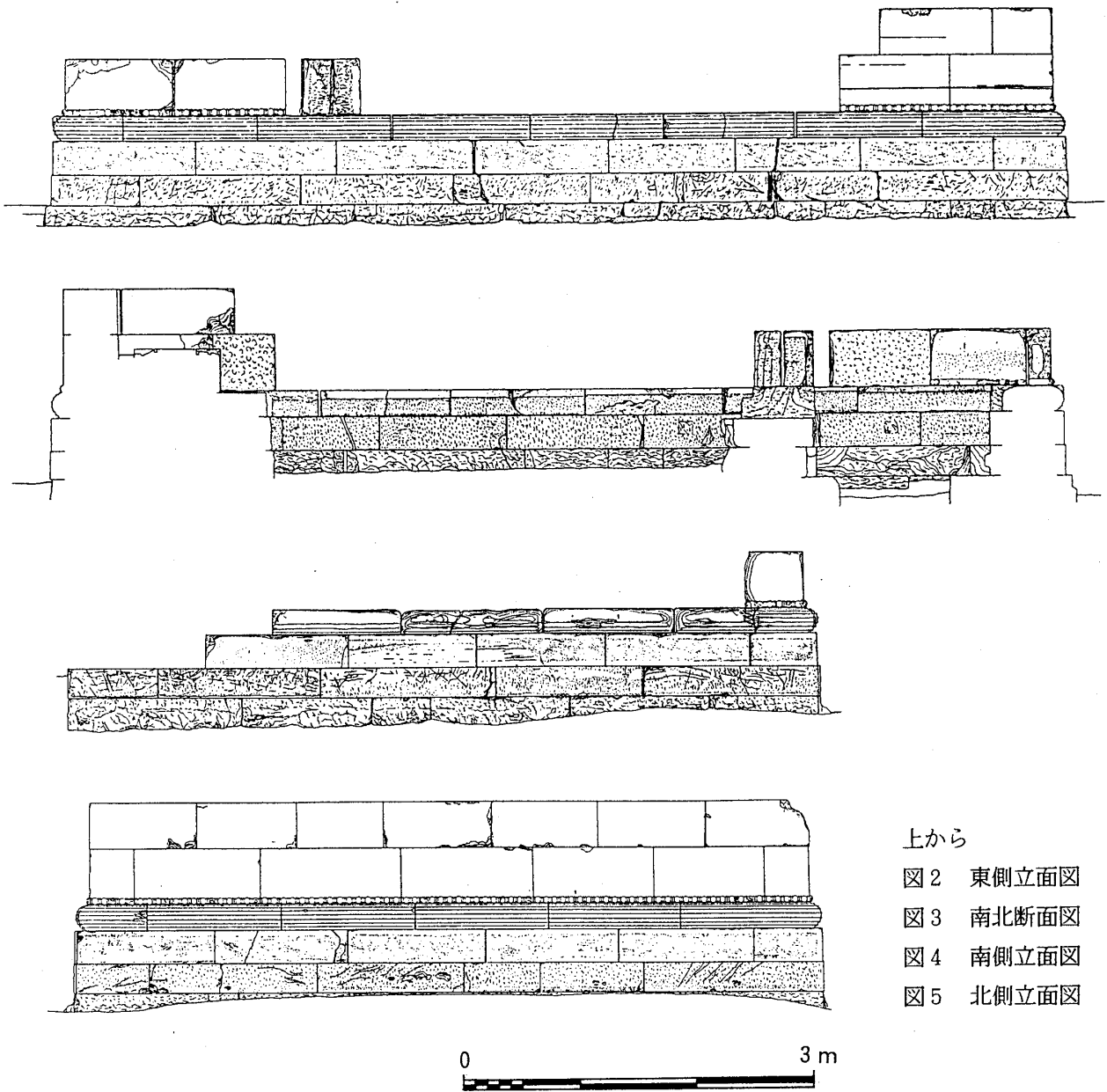


図1 デルフィ、マッシリア人の宝庫 平面図



上から
 図2 東側立面図
 図3 南北断面図
 図4 南側立面図
 図5 北側立面図

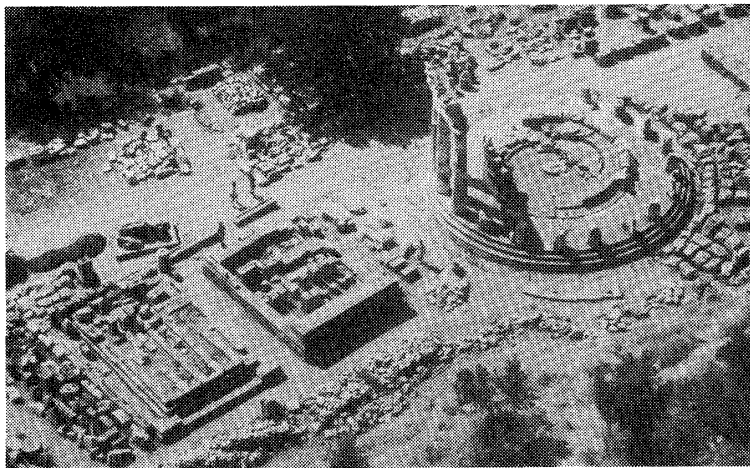


写真1 右より円形神殿、マッシリア人の宝庫、ドリス式宝庫

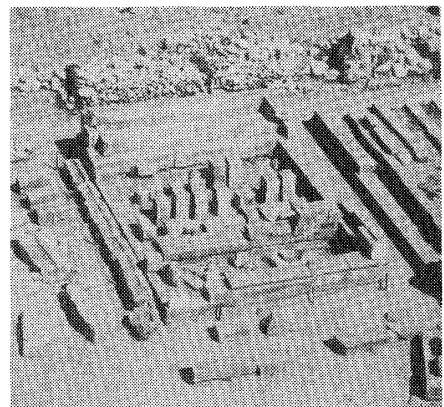


写真2 マッシリア人の宝庫

チリがとってある。外側の仕上げは上端と下端はほぼ最終仕上げに近い幅5 cmの縁取りがなされ、それに囲まれた部分は、細かい歯状痕の残る仕上げである。内側の面は中仕上げで、ハンドリング用の突起が各石に1～2個残っている。

2) トイコベイト・スタイロベイト

トイコベイトは西側面を除いて、あとは全部残っている。とくに東側では大部分が露出されているので、上面の仕上げの状態、各部材の接合方法と施工法などが良く観察できる。

トイコベイトの断面はほぼ半円形となっており、8本のフルーティングが水平に走っている。溝のアリス（先端部）は若干の欠損も見られるものの、まだ鋭い先端を保っている。フルーティングは宝庫の側面と後面を取り巻いており、壁と基壇部間の装飾として視覚的に大きな影響を与えている。

トイコベイトの層は正面ではスタイロベイトとなる。正面には階段が付き、スタイロベイトは人の足に踏まれるため、フルーティングは下半分のみにつけられる。スタイロベイトには、2本の円柱のベースの中心点とその輪郭の円の痕跡が残っている。円柱と円柱の間は傷みが激しく、角部が大きく擦り減っている。これはここが正面入口であるために、人の足による擦り減りと風化によるものと思われる。

3) オルソスタット

オルソスタットは、正面東側のアンタ部分、プロナオス間仕切り壁の東側、それに主室北側の壁3カ所に残っている。2枚の石を壁の外側と内側に縦使いに立てたもので、厚さはそれぞれ約20cm前後、高さは48cm。最下部の6.3cmほどは、1個の玉と2個の薄い円盤を交互に並べたアストラガルの装飾になっている。アンタ部分は外側の部材がL字型に正面に曲がり、そこに内側の部材が接合されてアンタを形成している。L字型のアンタ部材は奇妙なことに内側に曲がった部分のアストラガルスがなく、逆に内側に切り込まれている。おそらくここには何か装飾の小部材がはめ込まれていたものと思われるがよく分からない。アンタ内側部分のアストラガルスは、スタイロベイトの部分を除いて、半円形の断面のままに残されており彫刻はなされていない。プロナオス間仕切り壁の東端のオルソスタットは、両面とも残っているが、南側の部材は4つ

に割れ、表面風化が激しく剥離が進んで痛みがひどい。最下部は半円形のモールディングが一部残っているものの、玉は彫刻されていない。したがってプロナオス内側のオルソスタットにはこの半円形のモールディングのみが付けられ、玉は彫刻されていなかったと推定される。

4) 壁ブロック第一層

現在最も高い位置まで残っているのは、主室北側の壁から北東隅に続く壁の部材である。これは、オルソスタットのすぐ上にのる壁の第一層であり、上面の幅は北側47.2～47.3 cm、東側48.3～48.5 cm、高さ39～39.1 cmである。壁石の上面と下面の幅には約3～4 mm程度の誤差があり、壁の内側は垂直であるが外側の面はごく僅か内側に傾斜していることが観察される。上面の仕上げは縁部が仕上げ、その内側にはノミ痕の見られるやや荒い仕上げで彫り窪めた部分が、外側と内側に帯状に残っている。したがって、この上の石材はこの窪んだ部分に跨がって設置されたと推測されるので、壁の第二層には2列の縦使いの石材が並べられたものと思われる。

3. まとめ

以上、マッシリア人の宝庫における遺構の現況について述べた。調査はアルカイック時代によく建設された宝庫建築について、設計法と施工法の点から興味深い痕跡をとどめており、以下、一連の報告においてさらに詳細な報告と分析を行なう。

謝辞

本研究は鹿島学術振興財団の平成6年度研究助成金による。また敷地の航空測量については、東京大学文学部教授の青柳正規氏、大阪文化財センターの中西靖人氏、および(株)アジア航測の協力を得た。ここに記して謝意を表する。

注

1) R. Demangel & G. Daux, "Fouilles de Delphes, Les temples de tuf; les deux tresors" 1923.

2) Bommelaer, J.-F. "Guide de Delphes; Le Site" Ecole Francaise d'Athenes" 1991.